

政界再編と連立

——証言と記録で読み解く民社党裏面史——

梅澤 昇平

Political Realignment and Coalition Governments : An Inside History of the Democratic Socialist Party Based on Testimonies and Records

UMEZAWA, Shohei

Summary

A political party has an inside history not described in an authentic history. This paper aims to reveal the truth of the political realignment and the coalition governments in which the Democratic Socialist Party was involved, based on testimonies of persons concerned at that time and interviews with living persons concerned.

要約

政党には「正史」に書かれない裏面史がある。本稿では、民社党がめざした、あるいは関与した「政界再編劇」「連立政権劇」について、当時の関係者の証言録、さらに現存する関係者へのインタビューから真相に迫る。

キーワード

政界再編(political realignment)、連立政権構想(coalition government plans)

はじめに

多くの政党の歴史には、“正史”ともいえるべき記録がある。それは年表もつき、通史として概観するには便利である。しかしその反面、政党の党史刊行委員会などの機関決定にもとづいて書かれるため、どうしても自らの立場を正当化し、他からの批判、論評に耳を貸さない傾向が強い。会社の「社史」もそう

であろう。

民社党史についても、その通弊を免れることは出来ない。筆者は『民社党史』の編集責任者の一人であった。昨年出版された『民社党の光と影』（日本政党研究会編、富士社会教育センター、平成20年）は、それを補い、当事者たちが、自由な自己責任のもとにまとめたものである。これは正史たる『民社党史』（民社党史刊行委員会、平成6年）とは別の本部書記による内部からの考察を試みたものであ

る。

本稿は、その取材の過程で産まれた副産物ともいふべき、関係者へのインタビューをもとに、外部の関係者（他党の政治家、ジャーナリストなど）の証言を加えて、民社党がめざし、あるいは関係した“政界再編劇”あるいは“連立政権劇”の真相に迫り、後世の研究者の材料として提供することを目指している。民社党も解党して早15年、当時の幹部、関係者も少なくなってきたことを考え、不完全ながらも、インタビューを中心に、不十分なところは、他の関係者の過去の証言や記録で補った。

今回取り上げた項目は、政界再編あるいは連立政権がらみの以下の項目である。

1. 民社党と河上派との関係

民社党はなぜ社会党の「オール右派」ではなかったか？

昭和35（1960）年1月から平成6（1994）年末まで、民社党は存続したが、結党時に社会党の右派と呼ばれた「西尾派」と「河上派」のうち、後者は半数以下しか民社党に参加せず、昭和30年の左右社会党の統一時に比べ片肺飛行といわれた。なぜそういう苦しい出発となったのか。その背景には、戦後社会党の出発点と、左右の統一問題がある。左右統一のとき、その後民社党の初代党首になった西尾末廣（以下、敬称略）は、「無原理、無原則の無条件即時統一」に反対した。「掘り下げてみれば、左派と右派の相違は、外交政策だけでなく、労働政策、防衛政策などにおいても相容れないものが少なからずある。しかもその相違は偶然的なものではなく、世界観の相違から発した根の深いものである」「無条件即時統一を唱えるのは一種の日和見主義である。統一の翌日から必ず内部闘争を起し、

果ては再分裂ということになりかねない」⁽¹⁾と警告を発した。秘書だった和田一仁（のち衆議院議員、民社党副書記長）も⁽²⁾「（西尾は）統一慎重論だった。（社会党の）結党以来、左派に注意していた。浅沼が左傾化した。彼はテロの犠牲者になって（社会党は）浮かび上がった」と語る。

結果は西尾の危惧した通りとなった。しかし、保守合同、鳩山ブームの中で、左右の統一は大きなうねりとなり、それが実現した。当時、右派社会党政策審議会の書記であった大内啓伍（のち7代目民社党委員長）は⁽³⁾当時、「他に選択はなかった」と述懐した。「自民党支配が続くのは良くない。もう一本柱を立てねばならない。なにもしないでは民主政治は確立できない」「外交政策、共産党への態度などで右派が容認できないものがあるが、これを克服してゆかねばならなかった。しかし我々が心配した結果になった」と振り返る。

昭和34年の社会党大会で、いわゆる西尾問題がでっち上げられ、左派は右派追い落としの的を西尾に絞る。社会主義インター路線に立ち、マルクス・レーニン主義に反対する右派が、ここで党内改革に見切りをつけ新党結成となる。当時右派の青年部で、全労の若手幹部だった宇佐美忠信（のち同盟会長、連合会長代理）は⁽⁴⁾、「当時は、われわれは“右派”ということで左派と対決した」「私は戦後派なので“西尾派”などという意識はさらさらなかった」「（民社党の）結党について私など若手ははっきりすべきだという考えだった。河上派は河上（河上丈太郎社会党委員長）さんを尊敬していて河上さんの動向に注目していた。結党に参加した人は熱意ある人とそうでない人と二通りあった」という。

本部の組織担当書記で右派の青木清（のち民社党組織局長）も⁽⁵⁾、「統一時代は右派、左

派だった。右派で『西尾派』というのは本当にあったのか。西尾さんは神格化されていた。労組の闘士だったときいていたが、政治家として暴力を否定していた。派閥を自ら作って指導する人ではない。取り巻きが動いたのだ。西村などが参謀役だった。書記局では山崎（山崎礼二、のち民社党総務部長）らがいたが、私が事務局長をやらせられた。右派の中の半分くらいが入っていた。書記局では社民、日労（戦前からの流れ、社民党系、日労党系）は関係なかった。西尾の言動は正しいと思った。二ヶ月に1回ぐらい集まった。西尾が直接ではなく秘書の千葉堅弥（のち石巻市長）が番頭役だった。そのときは、西尾、西村も来た。われわれは思想で結束し、容共と戦っていた。結党は西尾除名が引き金だが、容共との闘いだった。「統一社会党内で毎日のように論争をし、仕事にならなかった」「朝から晩まで、左派との喧嘩だった」「統一時代に成田書記長が運動方針作成論議で『全労は第二組合だ』といったので、（われわれは）開き直った。『総評こそ第二組合ではないか』と。それで嫌な顔をされた。われわれは、曾禰さん（曾禰益、のち民社党初代書記長）から参考メモなどをもらい勉強した」「東京では、浅沼に左派と妥協しすぎると嘔み付いたことがある。（民社党に行くこと約束していた）中村高一（衆議院議員、河上派）は『勘弁しろや』と書いて社会党に残った。信念が揺らいだ連中だ」「分裂すべくして分裂した。追い込まれてというより信念を貫いたのだ。（私にとって）民社党結党は誇りだ」と胸を張る。

本部で機関紙担当だった伊藤郁男（のち参議院議員、民社党組織局次長）も当時を振り返り、⁽⁶⁾「民社党結党以前の社会党の中では、本部から支部段階まで、絶え間なく論争が行われてきました。結局、マルクス主義的社会主義か、民主主義的社会主義かに尽きたと思

います。水と油の論争を繰り返してきたわけです。これに決着が付いたのが民社党結党です」と語る。

ここで河上派とはどんなグループだったかが問題になる。このテーマだけで一つの論文が出来る。ここでは、簡単に概観する。左右分裂時に右派は「民主社会主義」という綱領草案をまとめ、社会主義インター路線に立っていた。しかし、どうも同色ではなかったようだ。

この点について朝日の政治記者石川真澄の見方が参考になる⁽⁷⁾。「（民社結党時に）河上派の大部分は社会党に残った。それは戦争中同じ右派でも西尾氏らが1942（昭和17）年の翼賛選挙に非推薦で当選したのに対して河上氏が推薦で当選し、戦後は公職追放になったことが響いている。河上氏らには、左派と決定的に対立することで左派から『右翼社会民主主義者が再び戦争協力の道を歩もうとしている』と非難されることを怖れる気持ちがあったとみられる。」これが事実とすれば重大だ。もうひとつ「ただ中間派の常で『統一と団結』以外には強い印象を与える主張がなく、55（昭和30）年の左右両派社会党の統一後、この党がマルクス・レーニン主義への傾斜を強めていくのを、河上さんは結局、傍観するほかなかった。その意味で戦前も戦後も、地位の割には強い影響力を持った政治家とは言いにくいうらみが残る。」と、河上派への評価は厳しい。

河上氏自身の発言の中でも、民社党分裂のとき、西尾派から右派連合結成へ、河上派への協力要請があったとき、こう述べたといわれる⁽⁸⁾。「英国労働党は党内に左、右の対立をしながらも、80年のあいだ一度も分裂をしない。資本主義か社会主義かの問題については結束する。従って政権を取れるのである。今分裂する時期ではない。」ここでは、労働

党がマルクス・レーニン主義に反対する社会主義インターの主力政党として活動していること、英国の国防に責任を負っていること、これに比べ、社会党はマルクス・レーニン主義勢力に侵食され、親中路線で、インターから批判され、安保・自衛隊反対と国防に責任放棄していることなど、をすっかり忘れている。英国労働党と日本社会党はまるで異質だ。

この分裂に関連して、当時河上派の重鎮だった三宅正一も⁽⁹⁾「浅沼、河上両君を頂点とするに日労系は、党を守って動かなかった。このため、結局、西尾末廣君に率いられた旧社民系系の離脱に終わった」と述べている。民社党結党時の党内の雰囲気について、大内は⁽¹⁰⁾「当時は米ソ冷戦が極東に厳然としてあった。これが政党、労組、教育などに大きな影響を与えていた。安保をめぐる抗争もそうだ。我々は革命やマルクス・レーニン主義に反対し、議会制民主主義を守る立場。これが右派と別れた根本原因だ。」「時代には時代のプレッシャーがあるのだ」と当時の厳しい内外情勢を指摘する。

しかし民社党の船出は、浅沼刺殺事件という思いもかけない、土砂降りの最悪のシナリオでとなり、以後、苦難の連続となった。

2. 幻の西尾暫定政権の真相

民社党結党は、安保闘争の嵐の中であった。改定安保条約の成立と引き換えに、岸総理は辞任した。混乱した世情の中で、後継となったのは、岸とは正反対に「寛容と忍耐」をキャッチフレーズに低姿勢を売り物にした池田勇人内閣である。しかし、これに行く間、民社党西尾委員長に政権を担ってもらおうという動きが水面下であったことが今日明らかになっている。なぜ少数野党の党首に白羽の矢

が立ったのか。

この提案者であった福田赳夫は以下のように経緯を述べている⁽¹¹⁾。「岸総理の退陣が決まり、私が『後はどうしますか』と聞くと『君の考えは』と尋ねられる。そこで私は『あれだけの大騒動の後だけに通常の内閣交代ではとても乗り切れないと思います。西尾末廣さん（民社党委員長）を担ぎ出したらいかがでしょう。西尾さんなら労働階級にも理解が得られるし、自民党でも信頼する人は多い。岸さんの決断があれば実現するでしょう』と進言した。」、このアイディアについて、「私が西尾政権に動いたのは1930年に英国に駐在していたときの強烈な印象が残っていたためだ。英国は第1次世界大戦の負担に加えて世界大不況の影響をもちを受けて往年の大英帝国の面影はなく国家財政、国家収支とも危機に陥った。（中略）『英国は危機状況にある』として労働党を脱党したマグドナルド氏を首班として保守党、自由党が協力してこれを支持し挙国体制をつくって危機乗り切りを図ったのである。私は安保騒動の後も日本もこの英国の経験に学んで少数民社党の西尾挙国一致内閣を狙ったのだが、結局幻に終わった」。福田の説明では、西尾との接触は3回あり、3回目の会談で西尾は「私を首班に推してもらって感激に堪えない。しかし、ここで私が首相になると政治家として死ぬことになる。政治家として命を落とすのはこの先もっと大事な機会があると思うので、今回は見逃してくれ」といったと述べている。同趣旨のことを、平成3年1月に行われた西尾生誕百年記念集会でゲストとして見えた福田が改めて述べた。さらに福田は朝日新聞紙上で明らかにしている⁽¹²⁾。福田がこの構想を考えたのは、一つは英国の事例であるが、もう一つあると思う。それは安保問題に対する民社党の態度にあったに違いない。⁽¹³⁾この幻の

構想について、西尾秘書であった和田は⁽¹⁴⁾「(この動きは)うすうす知っていた。西尾生誕百年パーティで福田が発言したが、仲介となった竹田儀一(元民主党幹事長、片山・芦田内閣で大臣)と西尾は関係があった」と証言している。

3. 政界再編のうねりとなった西村提案

「公民連合」あるいは「社公民」連合という政界再編のうねりを作ったもとは、昭和45(1970)年6月15日の西村委員長発言であったことは他党も認めるところである。その内容は、「昭和47年までに民主的革新政党(共産を除く野党)の統一を実現し、50年に革新統一政権を樹立する」という野党の大再編の提唱である。当時の新聞はこれを大々的に報じた。この提案の背景には、前年の総選挙で自民党が安定多数を確保し、野党は社会党が惨敗し、民社、公明が善戦したということと、公明党が創価学会とともに「言論出版妨害事件」を起こし批判を浴びていたということがある。しかも言論出版妨害事件追及の急先鋒に立っていた民社党の委員長からの提案だけに、党内外から、なぜか、と疑問に思われた。

この疑問について、西村委員長のブレンであった大内啓伍は、以下のように語った。「西村は、民社党の長所と弱点を知っていた。弱点は行動力がないことだ。学会や共産党に学べど。竹入からほとんど毎日、西村に電話が入った。学会からは直接ではなく『通訳』が立てられた。財界人と学者だ。西村は、合体ではなく、学会の組織力を活用しようとした。その後の、春日、佐々木の選挙協力論ではない。公明は言論出版事件で、ちょっと押せば倒れるかもしれない状況だった。この城

と話すべきか、落すべきか、西村は私の意見を求めた。私は三国志の例を引いて、落すより自軍に入れるべきではと話した。西村も、それで行こうとなった。西村は、統一戦線論で、新党論ではなかった。」

西村の甥で秘書だった西村章三(のち衆議院議員、民社党副委員長)は、「この談話を受けて、公明は政教分離を決めた」、また「社会党内の決起を促すための起爆剤になった」「西村は、公明党との合体論ではない、それは異質な政党だから」と語る。

この談話で党内にも衝撃が走った。言論出版妨害事件追及の急先鋒だった塚本三郎(のち5代目委員長)は、衆議院予算委員会で池田会長の証人喚問を要求するほどであった。塚本は⁽¹⁵⁾「『公明党を折伏する』という本の印刷を、印刷屋に出したら、できたゲラはマダラ。三千部注文したがキャンセルの電話。店頭に一冊も出ない。そこで街頭で売った」「私は言論出版問題というより仏教の問題としてやった。立正佼成会の庭野会長が法務委員会に喚問され、お詫びしたことがある。その例から私は池田喚問を要求した。そのため家族を一週間ホテルに姿を隠させるほどだった。」。まさに命がけの闘いであった。「ところが、西村委員長が頭を下げてきた。これ以上追及するなど。政教分離は、西村が念を押したためと思う。それで私も、攻撃の手を緩めた。」

当時、春日書記長の秘書だった長尾も⁽¹⁶⁾、「春日は西村の再編発言には驚いていた。当時、公明党、創価学会対策で、春日の地元の県会、市会議員は二人一組で、全国の学会施設を調査している最中だった。春日は、著作論集で、王仏冥合批判などを書いていたが、急遽原稿を差し替えた。そのため200万円余分に支払った。」という。

この西村談話で当時から一つの疑問があっ

た。それは西村のガンとの関係である。その悪化が、唐突な談話となり、決断を急がせたのではというものである。

これについて、西村章三は⁽¹⁷⁾「西村はまったく死ぬ気がなかった。だから委員長の資格で（選挙の）金を借りた。7月の参議院選挙で、金を借りに行き、佐々木に渡した。このときは、（入院中の）病院のスリッパを包帯で巻きつけて、裏口から出た。その（借金の）担保で自宅が取られた。」「病気のことは当時の他の秘書にも聞いたが、病気に気づいたのは総選挙戦で九州での出血だ。これでおかしいと気づいた。総選挙後、医者からガンという説明はなかった。本人もそう自覚していなかった。志半ば、死の一ヶ月前に、末期ガンと分かった。（地元の）堺に地方選挙の応援にきたのが、最後となった」

なんとも凄まじい話である。壮絶な戦死というしかない。

同じ秘書だった大松明則は⁽¹⁸⁾「（談話と病気は）直接関係はない。委員長になったとき、西村は日記に、3～5年の間、病気にさせないでくれと書いている。病気は（死ぬ）2年ぐらい前に気づいた」という。また談話については「政権交代可能な二大政党づくりだ。民社党だけでは少数なので、右派社会党にクサビを打ち込む。選挙で彼らを勝たせる。そのため宮田義二（鉄鋼労連委員長、そのご松下政経塾などの責任者に）と話、右派に票を廻し、金を渡すという話が進んだ。公明党は、言論出版事件で財界人に助けを求めた。そこで西村は、政教分離が大前提だといった。」と語っている。

つまり、病気と談話との関係は直接なかった。本人および周辺は病気には気がついたが、深刻な事態と認識したのは死の直前だったという認識で一致している。

この談話について、佐々木良作（4代目委

員長）は新聞社の長期取材⁽¹⁹⁾に以下のように語っている。「その（談話の）裏には、公明党よりも創価学会を中心とする側から、西村さんや、私のところに『連絡』や『働きかけ』が何度もあったからです。中身は、西村流の大ききな言い方をすれば『行くところがないから、公明党を買い取ってくれというんじゃないけれど、受け取ってくれないか』というわけです。一度ならず、ちょいちょい来ました。こちらからは、それに答える前に『創価学会と公明党は、ほんとうに政教分離をするのか、しないのか。早く分離せよ』とあおったわけです。」「あの時、私のところにきた『使者』は木川田一隆さん（東京電力社長、経済同友会代表幹事）でした」という。その上で佐々木は「だが当時の民社党内は社会党も嫌いだが、創価学会も嫌いだと空気が強く、公民両党を先に合体するというのは難しかった。そこで、私は春日（一幸）と相談して『やっぱり社会党との関係も重視して置こう』ということで、旗印を『野党再編』に切り替えたわけです」と述べている。

その後、公民は抜き差しならぬ関係に入る。選挙協力が深まり、民社党議員では公明党・創価学会の選挙協力が命綱になったものが少なくない。これは現在の自民党と公明党の抜き差しならぬ関係と同じである。

選挙協力は、当初は党内だけでなく、同盟系労組で反発された。アレルギーが強かった。それが変質したのは選挙協力を繰り返す中で「習性となった」からであるが、その転機となった事件があった。それは創価学会が“民労”という（直系の）労組を作ろうとしたことである。これについて、当時同盟会長であった宇佐美忠信は「創価学会が労組をつくらうとしていた。それで北条（北条浩、公明党書記長）、矢野（矢野絢也のち書記長、委員長）と話し合いになった。われわれはその動きを

説得し断念させた。それから“中道結集”での話し合いにつながった。秋谷（秋谷栄之助、のち創価学会会長）とも話し合った」と語った。⁽²⁰⁾

いま振り返ってみると、公民協力の評価は分かれるところである。この選挙協力で民社党は生き残った反面、独自性を制約され、公明党の存続を手助けした面もある。大内啓伍も⁽²¹⁾、「(この構想は)のち細川内閣で、社会、民社が始めて一緒になった」。しかし「(当時の)中道連合政権論は、その判断は今になってみれば問題なきにしもあらずだが」と苦い口調だ。というのも、民社党解党後の民社勢力は、公明とのスタンスの差で大きく分裂する結果となり、大内、塚本の両元委員長は公明の入った新進党には合流できなかったからである。

4. 「社公民」と「社民“和解”」の工作

「社公民」路線を強力に推進したのは佐々木良作である。昭和45年8月に江田社会党書記長、矢野公明党書記長、佐々木民社党書記長の会談が実現した。以後、この三人が社公民路線を推進した。三人の接触は公然化し、「社公民三羽鳥」といわれたが、江田が社会党内での足場が弱くなり「江公民」路線と変質していった。46年の参議院選挙で3党選挙協力が成功し、社会党は大勝したが、党内では3党協力の成果という評価が薄く、以後、公民との関係は冷える。「江公民」による新たな集団「新しい日本を考える会」も学者、文化人など有名人を揃えたが、同床異夢の嫌もあり、中途半端なものに終わり、政治結集の基にはなりえなかった。

「社公民」結集論に関連して、「社民」連合を優先すべきだという考えも民社党内では

強かった。西尾元委員長は、終始その考えを優先すべきと考えていたようだ。

西尾は「私の年来、描いてきた政権構想は、あくまで議会制民主主義を信奉する健全な革新政党を中軸とするものだ。その意味からいえば、やはり社会党の江田派、河上派と民社党との提携を中軸にするということに落ち着く」、そして「公明党は、もともとクラゲのような無性格な政党だから」と区別していた。これは西村提案の2年半後に書かれたものである。⁽²²⁾西尾は西村談話には距離をおいていた。「(民社)党内でも曾禰益君が最近『敗戦の跡を省みて』という意見書を発表して居るが、これは相当手厳しい内容のものである。(中略)事の始まりは45年6月の政界再編成に関する西村発言である」と婉曲に批判している。⁽²³⁾西尾としては引退後に、創業者として後輩の執行部を批判することは避けたかったのであろう。

西尾は、その後は、江田三郎に期待するものがあつたようだ。昭和51年の座談会で「僕はかつて江田君に話したことがある。そのとき割る腹を決めたら断行しなければいかんというようなことを江田君に言った」と語っている。⁽²⁴⁾少し遡ってみれば、江田書記長が37年10月に打ち出したあの「江田ビジョン」に当時民社党委員長だった西尾はいち早くエールを送った。「全面的に賛成だ。江田君も成長したものだ」とほめた。⁽²⁵⁾江田はこの発言で旧来の社会党の枠を破って注目されるとともに、党内では左派から集中攻撃を浴び書記長のポストを失った。

民社党内では、社会党右派へのゲリラ的工作が断続的に続いた。その中心人物は春日一幸である。そのいくつかはニュースとなった。例えば、昭和56年2月14日の東京新聞には「新党仕掛け人」「社党右派に急接近」という見出しが躍っている。「注目されるのは、春

日氏がごく最近、社会党右派の長老の山本幸一、高田富之、小林進の各氏や中堅の横路孝弘氏らと相次いで秘密裏に会談を重ねていることだ」⁽²⁶⁾。春日は委員長ポストを佐々木に譲り、自分は常任顧問として水面下の仕事を精力的に進めた。

飛んで、昭和62年11月の朝日新聞。「模索続く『社民和解』」「走る有志、動かぬ執行部」という解説記事がある。その中では、「今年5月、社会党の田辺誠前書記長、民社党の春日常任顧問、社民連の阿部昭吾書記長ら有志が社会、民社両党の歴史的和解を目指す方針を確認してから半年。今月十日に春日氏が社会党右派の会合で講演したほか、社民和解論を提唱する全電通の山岸章委員長の呼びかけに応じて田辺、春日両氏が全電通の自治体議員団研修会で講演するなど、徐々に実績を積み上げている。しかし、こうした動きは社民両党の執行部で公式に認知されておらず（後略）」という書きっぷりである。⁽²⁷⁾

こういうアヒルの水かきのような忍耐のいる仕事を春日が中心となって行った。

具体的にインタビューで出てきたものは多くはないが、春日秘書だった長尾務生は社会党右派への資金協力について語った。「“江公民”がらみで、3回くらい（春日は）（資金）援助をしている。江田にはなぜ社会党を離れないのかと文句をいっていた。山本幸一、小林進などは、いま離党したら落選するから、といていた」⁽²⁸⁾と具体的だ。右派に対する工作は、前述した大松証言でも、鉄鋼の宮田義二を介して西村委員長が行った、と多面的である。しかし、成果を上げるところまで行かず、俗な言葉でいえば「食い逃げ」に近かったのではなからうか。

5. 三木擁立劇と金権政治打破

自民党の内紛や政変に絡んで、民社党の幹部が揺さぶりに割り込んだケースは少なくない。自民党からの働きかけも同様であった。しかしそれらは党ではなく一部の幹部が中心で、実体がよく分からないものがほとんどだ。後日、関係者が証言して分かるが、しかしそれが全貌かどうか。前述した「西尾暫定政権構想」など、福田がしゃべって分かったもの。党史には出ようのない話である。佐々木良作、春日一幸がそうしたケースにほとんど絡んでいるが、春日は「敵に虚あり、乗じて撃つべし」⁽²⁹⁾が口癖だった。ここでは、それらのうち、三木武夫総理誕生を決めた椎名裁定の背景の一つになったと見られている民社党幹部による三木擁立劇、さらに、二階堂擁立劇について言及したい。

まず三木擁立劇である。昭和49年、田中角栄が金脈問題で総裁辞任に追い込まれ、自民党は後継を巡って窮地にたった。結果は、総裁選を避け、副総裁の椎名が福田赳夫、大平正芳らの有力者を差し置いて三木武夫を指名するという離れ業で党内の分裂を避けた。当時は、椎名の名人芸と呼ばれた。しかし、なぜ三木だったのか。これについては政界浄化で三木が脱党するかもしれないという動きを封殺するためだったという見方が有力である。しかし事実はどうか。

政治評論家でも意見が分かれる⁽³⁰⁾。朝日新聞の石川真澄は「まさかがなぜ起きたか、その理由としてあげられた中で、三木はたとえば民社党などと気脈を通じて自民党を割って出てしまうかもしれない、それを防ぐには、三木本人を総理大臣にするのがいちばんいいと読んだ『椎名の名裁き』という説が強いわけです。でも、本当にそうだったんだろうか」

という。共同通信の内田健三は「三木登場には諸説あるわけで、いまの石川さんの紹介した説は裏打ちとして、当時の民社党の動きが指摘されていますね。佐々木良作と三木との工作というのが出た。いや、あれは春日一幸が河野謙三にかけて、佐々木が三木にかけて、なかなかいい分業になっていたとも言われている。いずれにせよ、この説では椎名裁定は党の分裂を防ぎとめた神業だということになる。ところが、それとは全く逆の説もある。椎名が三木を出したのは第一着手にすぎなくて、あのあとは（筆者注、福田、大平と続く）仕掛けがあったのだと。」こうなると、この手の話は、闇の中である。

その後、春日の動きは読売新聞政治部の渡辺恒雄⁽³¹⁾に食いつかれた。河野謙三と会ったかと問われ「お会いしましたが、あの人は自民党員でもなんでもなし。無所属である。（筆者注、当時参議院議長で党籍離脱中）」「これは言うならば、『敵に虚あり、乗じて撃つべし』こういう状態でありながら、われわれが傍観しておるといことは、なんのために政権構想を国民に訴えたのか。これは責任を問われましょう。そこで、できるならば、社公民三党が中心母体となり、これに足らざるところ、自由民主党を脱党し、そのような革新政策にアプローチする、そういう人々を加えて、政党間に政権授受の体制を確立しようじゃないか。こういう真実心に基づいた話し合いを行った。」「三木新党をつくる、あるいは三木さんを総理にして三木政権をつくる、かようなことには、いやしくも民社党はぜんぜんタッチしておりません。」「三木さんは7月まで副総理でした。副総理であって、政治悪のさまざまな共同責任のある方ですよ。」「三木首班説はまったく考えていなかったか、という質問には「その通り」と語っている。春日は党委員長として三木説、それと

つながる佐々木「工作」を全面否定している。

渡辺恒雄は、春日取材の「あとがき」で、こう述べている。「昨年11月の保革連立工作には、春日氏の『河野謙三首班』構想と、佐々木良作（前民社党書記長）および麻生良方（落選中）両氏らの『三木首班』構想とがあり、自民党三木派の石田博英氏、鯨岡兵輔氏らが、野党側との工作にあたっていた。春日氏はこの対談で、麻生氏らの『三木首班』工作は、公党に根を持たぬ独り芝居だと決め付けた。春日と佐々木はずれ違ったか。

佐々木は、インタビューで、この問題への関与を詳しく語っている⁽³²⁾。佐々木の動きには、三木の政治信条に好感を持っていたのと、両者の間で交流もあったことが背景にある。昭和49年の佐々木の病気全快と衆議院永年勤続議員表彰を祝うパーティに三木も来て挨拶をしている。また普段、選挙などでの頼まれごともあったと、佐々木は述べている。「私は最初から三木さんをおつかぐという気はなかった。その頃『保革連合』は私の中ではまだタブーに近かったんです。」「そののち人を介して三木と会う。「三木さんとサシになって私は最初『一発賭けませんか』といった。『あんな、一生懸命やって来てるが、副総理、副総裁どまりじゃないか。田中退陣後も自民党の派閥力学からいって、あんな、これ以上のことはできやせんじゃないですか。むしろ自民党から飛び出して、政治家として最後の花を咲かせる、やりたいことをやる。そういう感じになるべきじゃありませんか。』」と口説いた。「三木さんは、はっきりした返事なんかしないですよ。でも私の話には百パーセントうなずくんです。眼が輝いていた。」「新党あるいは新内閣で、われわれが三木さんを担ぐという前提で、政策問題も話し合った。安保・防衛、経済、社会保障、労働問題。特

に私は農業政策をおおった。」

河野参議院議長を担ぐ動きについて、佐々木は「河野謙三さんを担ごうとしたのは春日（一幸）です。彼は社会党の佐々木更三君、山本幸一君、公明党の竹入、矢野君らとも連絡をとっていた。私は『三木擁立』の線で社会党の江田三郎さんにあたった。春日とは『あんまりこんがらがったら、おかしくなるぞ』と相談したことがある。春日は『河野擁立』の一方で『佐々木更三首班』も思い描いていたんじゃないか。彼は一生懸命になると、ほんとうにできるような錯覚に陥るんです。」
 「椎名裁定が新聞に出た日の朝、三木さんから電話があった。『ご存知の通りだが、どうしたものか』なんていうから、私は『今さらどうもこうもないでしょう。受ければいいじゃないですか。こちらのことは気にせんでもよろしい、行きなはれ』と励ましたんです。」と語っている。

「佐々木更三首班構想」もあったというなら何でもありで驚くしかない。「自社さ」の村山富市政権に匹敵する。無原則というか、目的のためなら手段を選ばないというか春日の思考回路は無限のようだ。

佐々木は、「三木さんとの会談はその時一回だけである。いろいろ尾ひれがついて三木、竹入、佐々木会談とか、小田原会談とか言われているようだが、一切そんな事実はない」と語っている。⁽³³⁾

現在、これ以上、事実関係を語れる人はいないのではないかと。民社党側が、三木、河野に分かれたのについて、大内啓伍は⁽³⁴⁾「私は関係していないので知らない。ただ、春日は三木嫌い。佐々木と春日の考えは一致しなかった」という。

6. 二階堂擁立劇とその前後

昭和59年、自民党副総裁の二階堂進を擁立して、時の中曽根康弘総理の追い落としを図ろうとしたのが二階堂擁立劇である。自民党の鈴木前総理、福田元総理、公明党の竹入委員長、民社党の佐々木委員長らが画策したといわれている一大クーデターともいべき事件である。中曽根総理の独善的態度に長老が反発し、野党も巻き込んだが、最後は、二階堂が所属する田中派の田中角栄に一喝されて二階堂擁立は吹き飛んだ。

民社側の動きについては、佐々木良作がかなり詳しく語っている。朝日新聞の「一日生涯・証言佐々木良作」ならびにそれらを収録した『一票差』の人生 佐々木良作の証言⁽³⁵⁾がある。そこで「権力の座につきたいがために自民党にすり寄るといのは、やってはいけない。これは私の信念です。しかし政治の活性化のため、『ことあれかし』の気持ちはいつも持っていました。昭和59年秋、中曽根首相が自民党総裁に再選される前に起きた『二階堂氏擁立』に組したのも、『ひょっとしたら相当のことがやれるかもしれない』という誘惑にかられたからです。」「私は竹入さん、矢野さんに、強く友情を感じていました。昭和54年の公明、民社両党の『中道連合政権』構想をつくったこともあるし、信頼関係は深いわけです。それに連合政権構想をつくったときに、『自民党と（連合を）やるなら、一緒にやろう、どっちかが先にやるなよ』と約束したことがあります。」
 擁立劇が、途中で難航すると春日に応援を頼んだという。「名古屋にいる春日君にすぐ電話をかけたのです。一通り事情を説明して、『お前さんの方も福田さんに電話してくれんか』と頼みました。春日君は何も文句を言わず『それで行こう。

明日は上京できないが、すぐ行く』といってくれました。」その後も、「ホテルに行く前に名古屋の春日君にも電話しました。春日君はすぐに現地で、自分も二階堂擁立に参画しているような記者会見をやった」。佐々木、春日の友情と同盟は半端ではない。

『野合』とか『自民党へのすり寄り』とか、あとで批判されたが、それは百パーセント受けるつもりだ。軽率だったと思う。二階堂擁立で『田中支配』が打破できるとは思っていなかったけれど、一步前進だとは考えた」と佐々木は述べている。これが失敗した直後、佐々木は談話を発表した。実はこの談話の口述筆記を筆者がさせられ、手書きのコピーであわただし記者会見となった。昭和59年10月31日である。「現在、政治の停滞を招き、大事な政策の遂行を妨げ、国会改革を遅らせているのが、いわゆる田中支配による一党独裁政治である。今回の二階堂擁立問題は、この現状を打開できるかもしれないという可能性とともに、連立への道の可能性をも内包していると考えられた。(中略)今回の二階堂擁立について、政策問題が先行しなかったのは、それが連立問題に至る事前の話し合い段階だったからだ。」という主旨である。

これに対して春日は役者である。新聞社のインタビュー⁽³⁶⁾に答えて「発端は鈴木前総理の中曽根首相に対する反発。(中略)それが福田、河本両氏の年来の持論である党風刷新に絡み合っ、熱気を帯びていった。鈴木さんから直接、公明党の竹入委員長のところへ伝えられ、竹入君から佐々木委員長にも動きが伝えられて、野党中道政の憂国路線と合流して、3、4日のうちに一気に風雲を呼んだとみるべきでしょう。」と語り、記者を煙に巻いている。

当時書記長だった塚本は蚊帳の外だった。塚本は⁽³⁷⁾「(二階堂擁立劇は)私が後から聞いた話。

佐々木さんは公明党と親しすぎた。だから私には喋れない。だから、公明党とやって、二階堂とやっていると言うことは、後から聞いた話です」と語る。

この劇の関係者のうち、ここでは、福田赳夫、中曽根康弘の弁を簡単に紹介する。福田赳夫によれば⁽³⁸⁾、「田村元(外様の田中派幹部、のち衆議院議長)が世田谷の私の家にやってきたのは、84(昭和59)年9月12日だった。『二階堂政権を作りたい』という。」「二階堂氏擁立の動きに同調したのも、私としてはこれによって金権支配を断ち切れなかと考えてのことだ」、しかし「あれほど決意の固かった二階堂氏がなぜ変わったのか、民社、公明両党との話し合いはどのような内容だったか、いくつかのミステリーが残った」と半信半疑だ。

これに対して標的とされた中曽根は⁽³⁹⁾、「茶番」と吐き捨てる。「福田、鈴木さんに加えて、佐々木良作、矢野、竹入君らが共謀したんですね。矢野君あたりがかなり積極的だった。」「あのとき、田中角栄さんは『二階堂はいかん』とはっきりいっていました。おそらく判決が白になったらカンバックしたいという気持ちがあったからでしょう。」「私は茶番劇だと傍観していましたがね」とたかを括る。しかし中曽根再選にとっては最大のピンチだった筈だ。

これには続きがある。佐々木自身「軽率」といったが、この行動で、民社党内では佐々木委員長への不信感が生まれてきた。それが、佐々木委員長の交代劇につながっていったことは間違いない。世代交代、若返り論の台頭である。翌年3月、佐々木は委員長を辞任するが、その理由を⁽⁴⁰⁾「59年秋の『二階堂擁立』の責任をとったんじゃないか、と報道されたが、全然違います。辞めたのは民社党内の世代交代論が発端です。」と語っている。これ

について中野寛成（衆議院議員、のち民社党書記長）は⁽⁴¹⁾「二階堂擁立劇で、佐々木、春日は協力と対立だった。塚本さんは、委員長をやる気満々だった。佐々木さんには塚本さんが野人に見えたようだ」と語る。

もう一つ、この擁立劇の前には、佐々木、中曽根の関係の友好と亀裂が伏線としてあるとみるべきであろう。

佐々木と中曽根の関係は浅くない。「二階堂を担いで、中曽根を引きずり降ろそうとしてのですが、私の心中はなかなか複雑でした。なぜなら、中曽根さんとのつきあいも古いんですから」「『二階堂擁立』は軽率だったと言いましたが、その意味の半分くらいは中曽根さんへの友情もあるんです。親しかっただけに、中曽根さんに気の毒なことをした、とも思っていました。一方で、これだけの権力者になっているのだから、一太刀、二太刀浴びせたって構うことはあるまい、という軽さもあったと思います」⁽⁴²⁾と内心を吐露している。取材した朝日の解説⁽⁴³⁾によれば、昭和41年の自民党総裁選で、中曽根は「反佐藤栄作」で動き、「反佐藤」の野党共闘を画策していた佐々木と偶然会い、衆議院解散に追い込もうという佐々木提案に中曽根も関心を示したとのことである。

二階堂擁立劇に至るにはなお具体的な背景があったのではなかろうか。それは前年（昭和58年）12月の総選挙での敗退がある。中曽根は、田中角栄に迫られて総選挙をせざるをえなくなり、そして敗北した。改選議席を37下回る250議席へ後退した。中曽根総理は「国民から熱いお灸をすえられた」と敗北宣言を出し、「田中氏の政治的影響力を排除する」という総裁声明を出した。その上で、衆議院での安定多数を確保するため、民社党、新自由クラブに手を伸ばし、12月末、ようやく新自由クラブを院内統一会派に組み込んで

連立政権を発足させた。民社党との話し合いは実らなかった。

しかし年が明けても、この話し合いは続いていた。中曽根は1月12日の日記に次のような合意があったと語っている。驚くべき具体的な内容である。

「夜9時、佐々木良作夫妻、公邸裏庭より来る。特別国会半ばで、政策協定、閣外協力などを行い、国会終了後、ロンドン・サミット直後に現実の方向で合意する。田中辞職決議は政治倫理確立決議をやり、仕事を具体的にやることで了解。（中略）佐々木君との合意次の通り。 私たちの次の時代の基礎工事も歴史的大事業だ。一に行革、二に教育、三に安全保障において大綱を合意策定する。（中略）政策協定を発表しアレルギー解消の時間をとっておく。国会終了後、ロンドン・サミット直後に連立実現を執行する。春日氏が事前に話すこと。田中六助、大内君（筆者注、政調会長と政審会長）を連絡役とする。公明は安全保障でいまだ不安定。事後、第二段の措置とする。（後略）以上を確認して別れる。10時10分」

極めて具体的な作業工程まで決められている。この合意がどこまで事実なのか、いまは民社党側からは大内の証言⁽⁴⁴⁾が取れただけである。

「連立には大義名分が必要だ。そこで政策協定を作り上げることが前提だが、深く討議するに至らず、形は実らなかった。その理由の一つは、確か、田中政調会長の体調だったと思う」「しかし田中政調会長とは信頼関係を高める行動を取った」と振り返る。

当時、政調会長だった田中六助は以下のように述懐⁽⁴⁵⁾している。「投票日翌日の19日から。私はホテル・オークラに部屋を取って、山口君（山口敏夫）を窓口の新自由クラブとの折衝に当たった。河野君や田川さんとも連

絡を取り、その一方で民社党の佐々木良作さん、塚本三郎さんとも接触を重ねたわけです。もちろん中心は新自由クラブとの連合問題でした。「民社党との接触もあったが、12月25日ごろ、中曽根さんと佐々木さんがこっそり会ったりした。これは外に漏れていない。民社からいろいろアプローチがあったが、こちらで民社と新自由と二股をかけるようなことはしなかった」と。しかし、これは新自由クラブへ配慮した発言かもしれない。

民社党側では塚本三郎が⁽⁴⁶⁾、もっとざっくばらんに語っている。

「中曽根内閣のときだったかな。(中略)選挙の直後に私のところに電話がかかってきて、あのとき自民党は過半数を割っておったんだ。(中略)それで二階堂から電話がかかってきて『ツカさん、連立を組んでくれ』というふうに僕に民社との連立の申し出があった。それで春日先生が金丸のところに行ったんだ。(中略)そして『連立の話がある。大臣を7人よこせ』と(春日が)言ったんだ。(中略)そしたら新自由クラブの田川君が一人の大臣で了承した。これが事実とすると、かなりどぎつい。佐々木ルートでは考えられない話だ。

結果は明白で、この連立話は実らなかった。

2月8日から総理の施政方針演説に対する各党の代表質問が行われたが、民社党佐々木質問は大きな話題を呼んだ。というのも、「閣外協力」に匹敵する政策協議機関設置を提案したからである。政治記者は以下のようにまとめている。⁽⁴⁷⁾

9日の民社党・佐々木委員長質問である。

「教育改革、財政再建、行政改革、防衛問題等当面の政策課題を巡り、与野党間に協議の場を設けて一致点をさぐってはどうか」と提案。これに対し首相は、「画期的提案なの

で党機関とも相談して誠意を持ってこたえる」と答弁している。

この佐々木提案は、大きな波紋を呼んだ。(中略)野党各党が冷やかな反応を示したばかりか、自民党からも、「民社党とだけ協議の場を持つ考えはない」という反発が早くも出た。しかも佐々木提案について自民党の田中幹事長が、「端的に言えば、閣外協力という問題が浮き彫りになってくる」と記者会見で解説したから、波紋はさらに広がった。

佐々木委員長は⁽⁴⁸⁾、マスコミの取材に対して、「提案の真意について 国会で本音の話し合いを行うのが常道だが、現実はきれいごとの対立に終わっている 政策決定の前に本音で話し合う場を設け、法案提出の是非を含めて合意を作りたい などの考えを示した」とかわしたが、腰を引いた印象を与えた。

さらに、NHK国会討論会で、永末民社党国対委員長は「(中略)民社党と自民党だけの協議とか、閣外協力するというのではない」と説明。14日には民社党としての『統一見解』をまとめ、「政策協議は自民党と全野党の間で行われるべきで、今のところ単独の政策協定は考えていない」とぐんとトーン・ダウンさせた。

以上が大体の経緯である。いきなり田中六助幹事長が応じてきたので、民社党側としては腰が引けてしまった。党内ではまだまだ保守との連立には抵抗感が強かった。特に、労組あるいは労組出身議員にその傾向があった。しかし、佐々木も、もとは労組議員である。

この佐々木質問の第一次草稿は筆者が手がけた。政策審議会事務局長の大きな仕事である。この中で「政策協議機関の設置」を盛り込んだ。そのアイディアは英国の事例であり、党の政策ビジョン委員長であった竹本孫一議

員のアイデアであった。竹本議員は政審会長を十年も務めた党内有数の政策通、アイディAMANであった。この内容は、その後、竹本の著書⁽⁴⁹⁾に全文掲載されている。それは『時局に関する緊急提言』という文章で、その第一項目にある。「一、国会に合同政策協議機関を設け、重要な政策は、閣議に提出する前に必ずこの機関にかけて衆知を凝集すること。ここで野党が絶対反対を表明した政策は、提出せざるものとするとともに、協議にかけられてこれを通過した案件に対する各党の議会における賛否は留保して自由すること」とある。この発想である。

政審事務局長兼政権ビジョン委員会唯一のスタッフであった筆者はこのアイデアを委員長質問に盛り込んだ。最初は、どうかと思ったが、委員長は食いついてきて自分流にアレンジした。当時は想像もできなかったが、先に引用した佐々木、中曽根ラインにこれを乗せようとしたのであろう。

しかし、提案した党の方が反響の大きさに、腰砕けになった。

そんなこともあったが、その後は、佐々木、中曽根の関係は徐々に疎遠になり、冷えていったのではなからうか。

夏を過ぎて、佐々木委員長は、仙台で厳しい中曽根政権批判を行った。筆者は、委員長の記者同行遊説には政策担当者としてよく同行をしたり、記者発表文の素案作成にあたった。9月29日の会見にも同行した。この会見で、佐々木委員長は、ほとんど原稿なしで強い口調で中曽根批判をしたので驚いた記憶がある。

当時の新聞記事⁽⁵⁰⁾は、「権力姿勢が強まる」「民社委員長、首相を強く批判」「田中派主導、自民に不満」という見出しである。記事内容は、

民社党の佐々木委員長は仙台市内で記者

会見し、自民党総裁選に絡む最近の中曽根首相の政治姿勢について 権力的な姿勢を非常に強めており、長期政権への野心もちらついている 田中派が政局運営の前面に出て、政権をかいらい化している 逆に首相の指導力、統制力の欠如が目立つ、などと強く批判した。またこうした点について、自民党内の実力者、他派閣議員の不平、不満は『予想以上に高まっている』として、「首相の再選を確定的にみるのはあまりに早計」と述べ、政局の行方は流動的、との見方を示した。

この会見が予想以上にきつかったので、帰京後、他の幹部に聞いたら、2月以来、関係が悪化しているのが背景にあるのではないかと指摘された。

そして10月27日に二階堂擁立工作が新聞で表面化した、とつながる。

あとがき

本稿では、上記以外にPKOと自公民路線、細川連立と「改新」、公民選挙協力と中道連合政権構想なども折り込む予定であったが、紙幅の関係で見送った。次の機会に譲りたい。

なお本稿は、多くの関係者のインタビューに依存している。複数回に亘るものもあった。記して謝意を表する。(なおインタビュー内容の文責は筆者にある)

インタビュー協力者(50音順、敬称略)

青木清、荒瀬修一郎、伊藤郁男、宇佐美忠信、大内啓伍、大松明則、玉置一弥、塚本三郎、中野寛成、長尾務生、西村章三、和田一仁

- (1) 西尾末広『西尾末広の政治覚書』毎日新聞社、昭和43年、321~323頁。
- (2) 和田一仁インタビュー、平成18年9月23日。
- (3) 大内啓伍インタビュー、平成21年6月12日。
- (4) 宇佐美忠信インタビュー、平成20年3月12日。
- (5) 青木清インタビュー、平成19年10月16日。
- (6) 平成20年6月22日の座談会での発言(『改革者』政策研究フォーラム、平成20年8月号)。
- (7) 石川真澄『人物 戦後政治 私の出会った政治家たち』岩波書店、平成9年、113頁、151頁。
- (8) 『三宅正一の生涯』追悼刊行会、昭和58年、415頁。
- (9) 同上、414頁。
- (10) 大内啓伍インタビュー、平成19年1月29日。
- (11) 『私の履歴書』日経ビジネス文庫、平成19年、168~170頁。
- (12) 平成2年4月23日朝日新聞紙上で国正武重記者が福田に取材している。
- (13) 福田は、西尾らが「民社党を結党したので改定安保条約批准は自民党の単独採決を避けられとの期待が持たれたと述べている(福田『回顧九十年』130頁。)
- (14) 和田一仁インタビュー、平成18年9月23日。
- (15) 塚本三郎インタビュー、平成18年9月22日。
- (16) 長尾務生インタビュー、平成19年9月7日。
- (17) 西村章三インタビュー、平成19年3月13日。
- (18) 大松明則インタビュー、平成21年2月10日。
- (19) 「一日生涯、証言佐々木良作」朝日新聞、昭和63年9月28日付。
- (20) 宇佐美忠信インタビュー、平成20年3月12日。
- (21) 大内啓伍インタビュー、平成21年6月12日。
- (22) 「御殿場清談」『時局研究会会報』昭和48年1月号。
- (23) 「御殿場清談」昭和48年2月15日号。
- (24) 「日本における政党の課題」『時局研究会会報』昭和51年9月10日号。
- (25) 毎日新聞、昭和37年10月14日付。
- (26) 東京新聞、昭和56年2月14日付。
- (27) 朝日新聞、昭和62年11月16日付。
- (28) 長尾務生インタビュー、平成19年9月7日。
- (29) 春日一幸『天鼓』民中連、昭和52年、147頁など。
- (30) 後藤基夫、内田健三、石川真澄『戦後保守政治の軌跡(下)』岩波書店、平成6年、200~2頁。
- (31) 「週刊読売」昭和50年3月1日号。
- (32) 「一日生涯、証言佐々木良作」の「三木擁立工作(上、下)」朝日新聞、昭和63年9月24日、27日付。
- (33) 佐々木良作『小田原日記』日本経済新聞社、昭和55年、142頁。
- (34) 大内啓伍インタビュー、平成21年6月12日。
- (35) 国正武重編、朝日新聞社、平成元年。
- (36) 東京新聞、昭和59年10月30日付。
- (37) 『塚本三郎オーラルヒストリー(下)』近代日本史研究会、平成20年、71頁。
- (38) 福田起夫『回顧九十年』岩波書店、平成7年、265~267頁。
- (39) 中曽根康弘『天地有情』文藝春秋社、平成8年、501~502頁。
- (40) 「一日生涯、証言佐々木良作」朝日新聞、昭和63年10月1日付。
- (41) 中野寛成インタビュー、平成19年3月12日。
- (42) 「一日生涯」253頁。
- (43) 同上。
- (44) 大内啓伍、電話インタビュー、平成21年7月21日。
- (45) 田中六助『保守本流の直言』中央公論社、昭和60年、68~70頁。
- (46) 『塚本三郎オーラルヒストリー(下)』28頁。
- (47) 牧太郎『中曽根政権・1806日<上>』行研、昭和63年、250~251頁。
- (48) 朝日新聞、昭和59年2月11日付。
- (49) 竹本孫一『わが道を往く一国際国家日本の進路』富士社会教育センター、平成3年、96頁。
- (50) 朝日新聞、昭和59年9月30日付。